

豆狸の寝言

副会長 三原幸二

ゴルフのあと、五時半から中華料理店で会食する予定になっていた。早目にゴルフが終わったので、店へ「少し早いがこれから寄せてもらってよいか」と幹事の人が尋ねてみたら、今仕込みの最中ですので申し訳ないですが、お約束どおり五時半にお願いしたいとのこと。再度電話しても、同じ返事がかえってくる。仕方なく五時ごろ出発したが、渋滞もなく店へ十分前に着いてしまった。

店で落ち合うようになっていた仲間も五時すぎに着いて、中に入れてくれといっても「五時半までは用意が出来ていない」と、けんもほろろに断られたという。大の男十五、六人が、寒さに震えながら店の外で立っていた。

やがてカーテンが開き、店の戸があげられた。きっちり五時半だった。

店は八人掛けのテーブルが二つ。カウンターは四、五人が座れる程度。おかみさん一人、コックさんが一人、手伝いの女の子一人の合計三人である。乾杯のあと、十数種類の料理が出てきたが、どれもこれも実に旨い。コックさんの手際よい包丁さばきで、料理が絶妙の間で運ばれてくる。お酒の出るタイミングも申し分がない。三人の人たちがもの見事にもてなしてくれた。

その間も、次から次とお客さんがやってくる。おかみさんは、今日は貸切りになっておりますと申し訳なさそうに断わっている。まことによく流行る店だ。

その時分になって、はじめて時間一杯まで待たされた訳が理解出来た。旨い料理と終始笑顔で我々に細やかな気配りをしてくれたおかみさんに心の中で拍手を送った。

いずれにしても、もう一度寄せて戴きたいお店であり、このようなお店と知り合わせてくれた友人に感謝したい気持ちになった次第である。

(おいしかった話)

